



明治時代における詠史歌の意味（一）：
晶子の新しい和歌の背景

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004549

明治時代における詠史歌の意味（一）

— 晶子の新しい和歌の背景 —

三 輪 正 胤

与謝野晶子が御歌所派などを旧派と呼んで「明治の旧派のやうに独創のない、進歩の無い、平凡陳腐な、回顧的、常識的、概念的、非情熱的な題材にのみ停滞しているもの」（注一）と批判したのは、明治三十年代に顕著にあらわれてくる日本的と称する中で詠まれた歌の在り方に対してであつた。この頃、御歌所の長官は高崎正風であり、香川景樹の流れを汲む税所敦子、小出衆、大口鯛二、阪正臣、それに黒田清綱等が、晶子の最も批判される対象であつたと思われる。こうした人々の歌業は、現在の所、資料が整理され、それが十分な研究批判に耐え得る状態には至っていない。そのために晶子の歌の革新性が異常に強調されて叙述されてきた傾向がある。

先に「黒田清綱の歌業」と題した論稿において、黒田清綱の和歌に関する業績を概観した（注二）。それは改めて明治の和歌の全体

像を捉えてみたための一ステップであつたが、清綱についてまず取り上げたのは、その養子黒田清輝との絵画との関係を考えるためでもあつた。本稿においては、同じく黒田清綱に焦点を絞りながら、なおもう少し違った視点から問題を設定してみたい。

黒田清綱の私撰集『歴代歌撰』は、和歌の歴史を神代からの連続と捉え、それを『万葉集』『新業和歌集』を含む二十一の勅撰和歌集を用いて説明することによって、和歌は天皇の権威の下に日本国の歴史を形成してきたと主張するものとなつていた。このことは更に黒田清綱の私家集である『瀧園歌集』（全三編の中に設けられた「詠史」と部立された部分に最も良く現われているとみることが出来る。

一 「詠史百首」をめぐる

『瀧園歌集』の初編から三編には、「詠史」の部が立てられている。一つの歌集の中で「詠史」という概念によつて部立が立てられたのは江戸時代後期頃のことである。

『和歌大辞典』（注3）の「詠史和歌」の説明によれば、「歴史上の事実または人物を題として詠んだ和歌。『続日本紀』中の史実『聖徳帝王有名諸臣』を撰び和歌を詠んだのに始まる。以後、天慶六（九四三）年日本紀竟宴和歌まで詠まれたが、その後の展開はなかった」云々とある。この説明は『日本書紀』という歴史書に関わつて詠史歌を述べたものであつて、きわめて狭い範囲で規定したものである。

佐々木信綱氏も『増訂 和歌史の研究』（注4）において「詠史」のことを述べている。佐々木氏は、「橘曙覧が詠史の歌」の一節を設けて、詠史の概略、その概念及び橘曙の詠史歌を考察している。ここでは、詠史歌を四分類して「1、その人また事がらをそのまま叙したるもの 2、評論論贊を加へたるもの 3、比喩縁語をもてあやなしたるもの 4、その人の心になりてよみたるもの」と、詠歌態度上の問題として詠史の歌を捉えている。その結果、橘曙覧の詠史歌を『志濃夫廼舎家集』の四十余首にみて、「曙覧がいかなる人格を慕うてそを歌に詠じたかといふ点、随つて曙覧の人格もわかる」

と曙覧の個人的な興味の対象として、「橘公」から「頼山陽」に至る人物が取り上げられたものと述べている。橘曙覧は慶応四年（一八六八）に没した歌人であり、後に正岡子規によつて、その写生的な個人の特殊な感覚が評価される。従つて佐々木氏が、詠史歌をこのような詠法上の点、個人的興味に関わる問題として整理したのも首肯されないわけではない。しかし、その詠者の生きた時代を考えると、詠史和歌をこのような評価と視点で済ますことは出来ない。例えば、曙覧の『志濃夫廼舎家集』に詠じられた「頼山陽」の歌は「外史朝廷おもひにますらをを 励ませたりし功績おほかり」（注5）とある。朝廷を助けるために、ますらをであり、もののふの武士が勇を奮つたのは全て『日本外史』を著した山陽の功績であると詠っているのである。曙覧にとつては、外国の勢力に迎合しながら開国へと向かう江戸時代後期の一状況を嘆き、天皇によつて作られてきた国家を重くみる山陽の功を讃えずにはいられないのである。これが臣下の在り方であると曙覧は評価し、国家を意識した詠史歌を詠じたのである。この傾向はそのまま明治時代に引き継がれ、明治国家の成立過程にあわせて、それぞれの立場から「詠史歌」が詠み出されてくるのである。

こうした状態を良く現しているものとしてまず、明治初期の加藤千浪の『詠史百首』正統を取り上げ、明治中期の『内外詠史歌集』

をその中間点とし、その系譜上に黒田清綱の詠史歌を位置付け、その背景から、晶子の和歌をみてみる。ことが出来るよう。

加藤千浪の『詠史百首』正統は『続日本歌学全書 第十一編 明治名家集』（注6）に収められ（以下、この本を翻刻本と称する）、続いて『現代短歌大系 第一巻』（注7）に正編のみが収められて、全文を容易にみるようになった。小泉冬三氏の労作『明治大正短歌資料大成 第二巻』（注8）を繙いてみると、明治になつてまず「詠史」の名を以て詠まれる歌集は、加藤千浪の『詠史百首』である。

『詠史百首』を詠んだ加藤千浪は、『現代短歌大系 第一巻』の「収載歌人小伝」、また『和歌大辞典』の「加藤千浪」に記されるように、そのおよその生涯は判明している（文化七年生、明治十年没）。しかし、その伝において「とくに詠史歌に名がある」と評価されているにもかかわらず、『詠史百首』の成立時期は不明であったし、どのような意味で評価できるかは明らかでなかった。ここに架蔵本を紹介することにより、ひとまずその成立年代は確定できるかと思われる。

架蔵本は、縦二六・四cm、横一八・五cmの楮紙、袋綴の一冊。表紙は本文料紙と同じ楮紙で、その中央に直接「千浪 詠史百首」と二行に記されている。全墨付き七葉、第一丁表に「詠史百首」と内

題があり、第二行に百首の第一首めにあたる歌の題が「神武天皇」とあり、その下に続いて「千浪」とある。人名と和歌一首が各一行に記されている。第七丁裏には「木村重成」の歌があつて本文が終わっている。従つて本書は、その正編のみである。「木村重成」の歌のあと、一行をおいて「明治二年己巳十一月源興院主純宏渉の」とめによりて「萩園主人千浪詠」と二行に記されている。源興院主純宏渉については、いまだ明らかにすることは出来ないが、本書は明治二年十一月の成立であることをひとまず確定できることになった。それにしたがつて統編は、当然のことながら、明治二年十一月以降、千浪の没年の十年十一月までということになる。しかし、架蔵本を検討してみると、事はそう単純ではない。それは歌の順番、語句に相違があることは言うまでもなく、正編と統編との歌が入れ替わっていることが最も大きな原因である。架蔵本は第三首めに「武内宿弥」として「呉竹のよの長人とのらししも すくなるふしのあれ はなりけり」の歌が記されている。この歌は統編の第五番めにあたるものである。架蔵本はここに一首増加したことにより翻刻本の九十五番に当たる「加藤清正」の歌がなく、都合百首となっている。架蔵本も百首歌としては完成しているのである。ここに正編と統編は、単純に正編を補完するために統編が編纂されたものでないことが判明する。このことは、明治二年の「もとめに」による「詠史百首」の

正編は、続編として詠じていた歌を書留めたものの中から編纂されたということが予測される。

正編と続編との関係は、補完関係でないとするれば、正統二集は目的を異にして編纂されたということにもなる。それはまた、正編のみに限っても、架蔵本と翻刻本とは、目的を異にしていたということとは指摘できる。

正編は、「神武天皇」に始まり、「木村重成」の歌に終わっている。

第一首めの「神武天皇については「神倭ふみまししより萬世にうこくことなき高御座哉」と、詠まれている。神武天皇が日本国を治め初めて以来、その高き位は厳然としたものとなっているの意である。

この歌に続いては「神功皇后」を「日の本にあまる光をたらし姫

ひとの国までたらしにけり」と詠んでいる。日本国中にその威力を十分に発揮した姫は、他国までもその威力を示されたと「息長余足姫」の本名の呼称に引きかけて詠んでいる。次の第三首めに架蔵本は、「武内宿弥」として「呉竹のよの長人とのらししも すくなるふしのあれはなりけり」がくる。「武内宿弥」が別名としてもつ「呉竹のよの長人」の意味は、宿弥が真率な性格をもっていたからであるというのであり、第一首めと連想的にもよく統一している。ところが、翻刻本のように第三首目に「日本武尊」の「もののふの鏡とも見よ大御名に かけのよろしきやまと心を」の歌がくると、武勇の誉れ

高き日本国の古代人を強調する姿勢が強く出されることになる。また、

翻刻本の九十五番「加藤清正」の歌は「鬼とのみ思ひのほかの情さへ あればや人もなびきよりけり」である。加藤清正は単なる虎をも拉ぐ武勇でのみでなく、人の心の優しさで人々の声望を集めたという意である。これはその二番前に「豊太閤」の「日の本にさる物ありと犬じもの 唐人さへもかしこみにけり」があり、朝鮮征討に向かった豊臣秀吉の武勇と良く相俟って、一種の完成物語となってしまう。つまり、清正の歌の「人」は、日本人と限る事無く、朝鮮の人々をも含むものと理解される余地を残しておく。これは明治十年代に向かつて盛んとなる「征韓論」を肯定的に、むしろ賛同する形となってくる。このことは翻刻本八、九番に百済の伊企灘とその妻大葉子が新羅の攻撃に対して大和心を奮って戦ったとする（この件は『日本書紀』欽明天皇二十三年七月の条によるものとおもわれるが）歌の心にも通ずるものとなっている。ここにおいて政治的な立場が強く表にでてくることになる。ところが、正編の最後となる百首めは「木村重成」の歌で「今はにもこころをこめしたきものの 香くはしき名は世にほひけり」と詠じている。重成は出陣の最後の時に当たっても、心を込めて兜に香を薫きしめた優雅な風情の武士であったと称賛している。これは二十三番（翻刻本では二十一）に「清少納言」を詠じて「巻あけしをすのとやまの雪にこそ ふか

き心はあらはれにけり」と、御簾を懸けて雪見をした風雅な心を讃えた歌の心と一脈通ずるものをもっている。武勇の士も単なる力の象徴となる武士ではなく、雅びを解する人である。つまり、風雅の武士に相混じって、風雅の女性などが詠まれているのである。また翻刻本七十五、七十六、七十七番では、橋正成、橋正行、北島顕家などを惜愛する情を詠じており、南朝方の立場に立って歴史を正当化していることは明らかである。

正編全体では、南朝を正統とする判断の上に、武勇と風雅を解する人々を讃えることになっており、武勇の人も風雅の伝統のなかに生きていたことを詠ずるところに本書の主眼があつたものと理解されよう。それが架蔵本における明治二年の千浪の心情であつたということになる。これに対して翻刻本は、明治十年代に近い頃の「征韓論」に組する心情をより強く現したものであるといふことができよう。

一方、続編は「仁徳天皇」を詠じた「弥来る新すの煤に知られけり 煙もしげききみがめぐみは」に始まる。『日本書紀』に見られる仁徳天皇の政の事績を平凡に詠んだものである。これが八十七首には「許由」を詠じ以下百首めの「孔明」まで十四首を中国の偉人を取り上げることになっている。この形は、明治時代半ばに至る多くの歌集に見られるもので、例えば、明治十三年五月に出版された『題明治新和歌集』（猿渡容盛が、及ぶかぎりの多くの人々の歌を題

別に編纂した書）では、その詠史の部は、神代に始まり大石良雄に至る日本人を対象に十五首、中国の愚王から張良に至るの八首を集め編んでいる。

典型的な日本と中国の偉人を歴史の中で語り継ぐことの伝統は、古く平安時代の仏教説話において行なわれた、仏教の三国伝来話に求めることが出来よう。いま、その方法は新しい明治という時代の中で、また蘇ってきているのである。それは蘇るといふよりは、日本という国を理解するための必然的なものであつたと言つたほうが良いのかもしれない。しかし、こう言つたからとて、この続編は、また、単純な中国と日本の対照による英雄讚美集となつていてはならない。続編の七十七首めに「光君」をあげ、八十六首めまでを『源氏物語』の主要な女性をもつて詠じている。例えば、「光君」を「隈氏の名前の謂れを詠み上げている。文学作品などにも配慮する広く人生を見る眼をもつていたものと評価することが出来る。続編においても、武勇に勝れた人物を取り上げる単純な英雄論とはなつていないのである。

このような評価をとりあえず下すことが出来るのは、『内外詠史歌集』との比較において、それなりに浮かび上がってくるものがあるからである。

二 「内外詠史歌集」をめぐって

『内外詠史歌集』（注9）は「新代のみまつりごと、しげくおはしますうちにも、ふりにし道を興し給はむの大御心にやおはしますらん。御まへちかく侍ふらふ人々に題を賜はりて歌を奉らしめ給ふこと、一日もおこたらせ給はで、あまた年になりぬれば（引用に当たっては、平仮名の原文に適宜漢字を宛てた）」と始まる序文に明らかのように、和歌道の再興をも願った明治天皇の御側に近く仕えた人々が、天皇からの出題を得て、その詠歌の書き留めが多くなった。中でも、詠史歌については研鑽を積んで多くの歌を得たので、初心の人のためにと、高崎正風の許しを得て、税所敦子が出版するに至ったという。御歌所歌人の税所敦子の編纂になるものであって、明治二十八年六月に出版された上下二冊の本である。高崎正風は言うまでもなく、当時の御歌所長官であり、税所敦子はその下に日々精励していたのであり、本書は、明治天皇側近の意識を最も明確にしたものと理解される。そのためもあつてか詠歌は、当代の人々に限らず、江戸時代の国学者を初め、鎌倉時代の藤原定家、更には平安時代のものでを集めており、詠史歌の集大成を計つたかと思われるところがある。

詠歌の対象とされた人々は、日本に対して中国を含む外国とに分

類される歴史上の著名人である。このことが本書の題名を「内外」とした理由であろう。日本については、神代之部として三十二人、以下同じく天皇之部に四十一人、皇后之部に五人、皇子之部に二十八人、人臣之部に四百三十二人（人物以外にその人に関わる歌をも付加している）、隠逸之部に十九人、釈史之部に二十六人、女流之部に八十人をあげている。外国人については、外国之部として二百人をあげているが、中国は百七十三人、二十七人が他の外国人である。

そのおよその時代と人物を知る目安としてその初めと終わりの人物を上げると、神代之部は天御中至尊（アメノミナカノヌシ）からウガヤキアヘズ尊まで、天皇之部は神武天皇から後村上天皇まで、皇后之部は佐保姫命から建礼門院まで、皇子之部は五瀬命から良純親王まで、人臣之部は可美真手命から二宮尊徳まで、隠逸之部は浦島子から池大雅まで、釈史之部は道昭法師から僧月照まで、女流之部は稚足姫から玉蘭女まで、外国之部は中国は神農から賓客頭盧（びんづる）までと、他の外国は釈迦から徐世賓（ジョセフィン）までである。

この単純な一覧からも推測される通り、まず日本は神代之部から始まる。言うまでもなく、神代からが正統な歴史として語られるのである。神代の一番に歌われるのは天御中至尊で、渡忠秋の詠で「ひ

とりこそなり出けらし久方の あめにさきたち天におくれて」とある。

天地が出来上がった後に、独り生まれた神と言うのは『古事記』『日本書紀』のいずれにも記事がある。しかし、『日本書紀』では一書に拠る文であつて、書紀本文では国常立尊が第一の神である。これは天皇の部の第二番に、国常立尊として、村田春海の詠「あしかひの浪のきさしも遠からず 天津日嗣の始とおもへは」が置かれていることによつて、『古事記』を根底に置いた歴史意識とみて良いであらう。『古事記』は天御中主神を天地の初発の神としており、以下五神をあげ、これを別天神として、次に国常立神を上げる形が確立しているからである。しかし、以降に詠まれる神々の記事は『古事記』に拠っていると必ずしも限定できるものでなく、『日本書紀』も同様に重んじられていたと見るべきであらう。

天皇之部の初めは「仁徳天皇」で九首が並ぶ。その一番は、先に記した加藤千浪の歌である。仁徳天皇の民への哀れみは、天皇の資質として必要とされているのである。これは、仁徳天皇の九首目の歌として、渡忠秋の「人のよとなりて三十もし一文字は 大御歌こそはしめなりけれ」をあげ、和歌を詠ずることが出来ることが天皇に求められる資質としてあるとみることも通じていよう。仁徳天皇は、更に第三番で「大君はかみにしませは御軍に やたからすさへいてつかへき」と詠ぜられており、天皇は神であることが確認

されている。

天皇之部は「後村上天皇」の「三吉野の青峰か苔のむしろにも 天津日かけはくもらさりけり」で終わっている。南朝方の正統性を順徳天皇の後、龜山天皇、後醍醐天皇と続けて、後村上天皇の没後も威光は消えなかつたと言うのである。この南朝方への思いは皇子之部の構成の仕方にも明瞭に現われている。式子内親王の後は、全て南朝方の皇子であつて、宗尊親王、護良親王、宗良親王、懐良親王、良純親王と続いて、これら親王の悲しい運命への同情が歌われている。この皇子之部の初めでは五瀬命を詠じて「流矢をいきとほろしみかま山に 雄たけひましてかくりまし剣」とある。神武天皇東征に当たつて、紀の国竈山にあつて矢傷のために亡くなったこと（『古事記』中巻、神武天皇の条によるか）を、雄々しい死と讃えている。これは惟喬親王を詠じて「よをすててをの山深くすみそめの 袖いかはかり露けかりけん」とあつて、不遇な身となった親王に涙を禁じ得ない心を詠ずる心境とも通じている。全般に皇子之部には悲哀の情が流れていると理解されるものが多い。

人臣之部では、同じく神武天皇の東征に際して、大和宇陀の地においての道臣命の功（『古事記』中巻、神武天皇の条によるか）を、享長が「秋つしま大和のくには道臣のみちひきよりそひらけそめける」と詠じていることが注目される。大和の国の政の「導きの道」

を作ったのは道臣命の功績によるとの記述は『日本書紀』に「汝、忠ありて且つ勇あり。また能く導の功あり。是を以て、汝が名を改めて道臣とす」（日本古典文学大系『日本書紀』の神武天皇即位前六月の条の訓による）とあるのに拠っている。『古事記』に拠っただけでは、その功の具体的な内容を理解できないのであり、『日本書紀』に拠って、その功を忠と勇として評価できるのである。人臣の在り方は、忠と勇に象徴されるといっても良いものがここには見えてくる。人臣四百三十二人を通して一貫した理念を抽出することは難しいものの、この道臣命から導きだされる観点はかなりの正しを持つている。従って、例えば平将門が起こした事件は、反乱として厳しく糾弾されることになっている。重道は「くれ竹の園生としひてなのるとも まかれるねさし末通らめや」と、例え一時は正当を唱えての将門の事件ではあっても、根本が誤っているかぎり長くは続かないものだという。平清盛に対しても同じであって、小野務は「のも山もみな我ものといもかこの はひひろこるも哀れ一とき」と詠ずる。野山に至るまで全てが我がものと、その威を誇っても、それは一時の事にすぎないという。いずれの歌にも、ある正しい根底が守られていないかぎり評価されない視点が厳としてある。

— 南朝方を正統とする視点は、この人臣之部においては明確すぎるほどに現われている。

北朝方の始といわれることになる足利尊氏に対しては十首が詠まれている。一番目には村山松根が「いかなれは此みなもとのにこり水 末もあまたのよに流れけん」という。悪の根源であるこの濁り水は、いかなる由縁で永い世の中を流れてきたのだろうか、余りに永く尊氏の系統が続いてきたことへの嫌悪とも言うべき情が述べられている。二番目には八木真門の「南さす楠の大枝のかれしよりこころのままにふくあらしかな」が並ぶ。南朝を守った楠氏、特に大枝である正成の死後は、嵐のごとく尊氏は意の赴くままに振る舞ったという。これに続く八首もみな同じ趣旨であって、尊氏を悪の権現とする。これに対して南朝方の人臣は、当然のことながら称讃の嵐のなかにいる。楠正成には六十首、楠正行には三十七首、鳥高徳には三十八首、源親房には三十七首、新田義貞には二十七首、名和長年には二十四首などと多くの歌をあげている。代表となる人について一首ずつをあげてみれば、楠正成は忠秋の「かつらきの神とも神とはかりけん 跡こそ千よの守りなりけれ」がある。神となつた正成は、葛城の神とも計略を練つたのであろうか、その御蔭により末々の世に至るまで神の守りは続いていることだと、神格化された正成を詠ずる。正行には広満の「いかはかりみにしみにけん桜井の さとす言葉のふかき匂ひは」がある。父正成との桜井の駅での別れの言葉はいかに深く心にしみたことであろうかと情を寄せて

いる。児島高德は中島真誠が「武士のやまと心をさくら木に、うつけはよよにかをるからうた」と詠ずる。後醍醐天皇への武士として
の心を漢詩に現して、桜の樹に彫りこんだその大和心は何時まで
句が続けていくことだと、大和心に現われる忠誠の心を誉めている。

源親房には飯田年平の歌が「神ながら天つ日嗣のつたはれる　しる
しはきみか文にみえけり」とある。親房が著した『神皇正統記』に
よって、神の国の正統は美事に伝わったと、その功の大きいことを
讃える。これらの事柄は多く『太平記』に拠って史実として語られ
ているのである。

次に問題となるのは、千浪の集『詠史百首』においてとりあげた「征
韓論」に関わることである。千浪の歌において豊臣秀吉と加藤清正
の歌で意味を問うた。ここでも同じく秀吉の歌を見るに、六首記さ
れるうちの一首が八田知紀の詠で「大そらにかけりし龍の末つひに
よもの海さへのまんとせせし」とある。日本の空を駆けめぐった
龍は、遂に四方の海までをも飲み込もうとしたと、その威勢の良い
ことは言うものの、それ以上の評価には至っていない。これに対し、
清正については、八首のうち六首までが韓国に足跡を記したことを
歌っている。山本則忠は「風をおこす虎てふ名のみ聞てたに　草木
をのくもろこしか原」と詠ずる。風を巻きおこす虎の名を聞くだ
けで、韓国の草木は恐れ戦くという。虎を倒したという清正の名の

高さを言うのである。しかし、この事柄は簡単には「征韓論」の妥
当性には結びついてこない。それは、明治になってからの西郷隆盛
の詠まれ方に関わっているからである。西郷隆盛は明治の人物とし
ては一番多く八首を数える。その中で「征韓論」に関係あると見る
ことの出来るのは一首だけである。それは綱安の「つるきをれ駒は
たふれしから歌を　謡ひし時やかなしかりけん」である。剣も折れ
駒は倒れて敗戦となる韓を討つ歌を歌ったときは、どんなに悲しか
ったことかと同情を呼ぶ様となっている。他は薩摩の海に散っていっ
たことを悲しむ歌となっている。とくに八首めは弘済によって「千
年川清きそこひはみえなから　なとにこる名を世に流しけん」と詠
まれている。西郷の事績は清き心から起こったものとは認められる
ものの、なお濁る名を残してしまったことを嘆かずにはいられないと
いうのである。尊皇攘夷の論を抱き、僧月照と共に西下し、また「征
韓論」にも敗れて命を終わる西郷には、もう一つ大きな立場からの
視点が欠けていたことが指摘されているのである。明治二十二年には、
西郷の復権はあったものの、『内外詠史歌集』が編纂される二十年
代後半では、まだ評価されるには至らないのである。ここに千浪が『詠
史百首』で見せた明治初年頃との大きな違いが見られるのである。
『内外詠史歌集』において、もう一つ注目されるのは、外国之部
に詠まれた人々のことである。中国の人については、それまでの高

い評価を特に弱めるようなものは見られない。ところが、それに続く西欧の人に対しての認識には特異なものが伺われる。その特異性とは、余りに低い評価であり、それは余りの無知に基づくものと見られるものがあることである。例えば「華盛頓(ワシントン)」を詠んで二十首をあげるものの「国をおもふ心つくもしられけりうちなひきたる民の草葉に」と童子御方はいう。アメリカ合衆国の建国に尽くしたその尽力の大きさを、人民の言葉から知ることが出来るという。そのワシントンの心はどのように捉えられているかといえは「身にあたる玉はころもにとまりて づらぬくものは誠也けり」と小出燦は詠む。戦いの中から独立を勝ち取ったワシントンにあったものは誠の心であったという。誠というものは、儒教精神、それに加えて武士道思想という極めて狭い視野の中から生み出されてきたものである。それが当時の歌人の世界観であったとすると、欧米人の心は容易には汲み取れないであろう。

これは「ミル」を詠んで「西の海深きみしまに生るみるの ふかきねさしをしる人やたれ」と近藤芳樹はいう。イギリスの経済学者ジョン・スチュアート・ミルを、その名の「ミル」に懸けて海藻の「みる」を読み込む技巧が辛うじて歌を保っているに過ぎない。ミルが明治の世に与えた思想的な影響などは、ここからは全く伺うことが出来ない。新しい時代における和歌の限界がここに見えているとい

つても良いであろう。

注

- (1) 『晶子歌話』(天祐社 大正八年刊)
 - (2) 『黒田清綱の歌業』(人文学論集 第十七集 一九九・三)
 - (3) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和六十一年刊)
 - (4) 『増訂 和歌史の研究』(京文社 昭和二年刊) 三七七—三八〇頁。
 - (5) 『校註 国歌大系第二十卷 明治初期家集 全』(国民図書株式会社 昭和三年刊) 所収本による。
 - (6・7) 『現代短歌大系 第一巻』(河出書房 昭和二十七年刊) の本文は、『続日本歌学全書 第十一編 明治名家家集』(佐々木信綱校註 博文館 明治二十六年刊) に拠っている。
 - (8) 『明治大正短歌資料大成』全三冊は、歌論、歌集など多くの資料を整理したものである。第二巻は歌集を年代順に並べ、それに簡潔な解説を付したものである。昭和十六年立命館出版部から発刊されたものが、昭和五十年に鳳出版から復刻された。
 - (9) 立命館大学図書館蔵「白楊荘文庫本」による。
- 本論文は、平成十一年度大阪府学術奨励資金に基づく報告書の一部として執筆した。